

総合討議の総括

統一テーマ 「ロマンス語における文法化」

鳥居 正文

Masafumi TORII

日本ロマンス語学会第43回大会の統一テーマは「ロマンス語における文法化」で、この枠内で次の2件の報告があった。

1. 後藤 斉 (東北大学)

「文法化—ロマンス言語学と一般言語学」

2. 小林 標 (大阪市立大学)

「ロマンス諸語における否定補助語の文法化過程」

この2件の報告に引き続き、総合討議が行われた（なお、総合討議の司会は鳥居＝本稿の筆者が務めた）。大会の録音資料が残っており、報告および討議の様相についてもある程度忠実に再現することは可能であるが、聞き取りが困難な部分もあり、また紙数にも制約があるため、本稿は要約的な報告にならざるを得ない。報告者および質問者の方々の発言内容を十分に伝え切れていないとしたら、本稿の筆者の能力不足によるものゆえ、お許しいただきたい。

まず、後藤氏と小林氏のそれぞれの報告内容を以下にまとめておくが、後藤氏の場合は本報告に基づく論文が本誌に掲載されているので、詳細については同論文を参照していただくこととし、ここでは本誌に論文が掲載されていない小林氏の報告内容により多くのスペースを割くこととする。

1. 後藤氏の報告「文法化—ロマンス言語学と一般言語学」

文法化の最も標準的な概説書 Hopper & Traugott (2003)¹⁾でもメイエの研究が現代の文法化研究の出発点をなすものとして高く評価されている。それと同時に、同書では文法化研究の先駆者としてフンボルトなどの名前を挙げることも忘れていないが、青年文法学派の代表格であるパウルについてはあまり触れていない。ところが実際は『言語史原理』でも文法化と類似の現象が数多く取り上げられており、パウルについては再評価の必要がある（フランス語の例で言えば、pas や point による否定の形成、副詞接尾辞 -ment の形成、など）。パウルとメイエの大きな違いは、ソシュールの弟子である後者が体系の概念を取り入れている点にある。文法化についても同様で、メイエは文法化を体系全体を変形する現象として、したがって新しいカテゴリーや形態の創出を

伴う現象としてとらえている。パウルは 19 世紀の歴史言語学の総まとめを行ったのに対し、メイエは 20 世紀への橋渡しをしている。その意味では現代言語学の文法化研究はメイエとともに始まったと言ってよい。

歴史言語学が言語研究の主流ではなくなるにつれて文法化も忘れ去られたような状態にあったが、1960 年代以降の言語類型論の発展があって、再び文法化が脚光を浴びるようになり、80 年代以降、文法化研究が言語学の中で大きな位置を占めるようになる。類型論とのつながりで、言語間にどのような共通性が見られるのかという通言語的 (cross-linguistic) な関心が現代言語学の大きな流れである。このような観点から Heine & Kuteva (2002)²⁾は、文法化が起きるメカニズムを次の 4 種類にまとめている。すなわち、1) 意味が希薄化すること、2) 使われる文脈が広がること、3) 脱範疇化すること、4) 音的な摩耗、である。つきつめていくと、マクロ的な把握、たとえば文法化は一方向的に起きるものである、といったようなことが非常に強く主張される。

このような通言語的な把握は言語学にとって有益であろうが、一方において、ミクロ的な把握、つまり個別の言語の変化をきちんと捉え直すことが必要だという動きも文法化研究の中にはある。ロマンス言語学が文法化に貢献できるとすれば、非常に長いスパンの言語の記録を持っているということ、一つの起源から多くの言語が出てきていること、といった点にあると思われる。ロマンス言語学のこれまでの蓄積を文法化という観点から捉え直すことによって新しい見方ができるのではないか。

概略このように述べられた後、後藤氏は具体的資料に基づいて、たとえば古典ラテン語の疑問詞 *quomodo* 「いかに？」(ここからフランス語 *comme*, スペイン語 *como*, イタリア語 *come* などが出てくるし、フランス語の *comme* からは更に *comment*, *combien* などが出てくるが) が原因を表わす従属接続詞の働きを持つようになっていった過程はそれほど直線的なものではなかったのではないかとの見通しを示されたうえで、この種の問題はロマンス言語学と一般言語学の双方からの貢献によって解明できるのではないかとその発表を結んでおられる。

2. 小林氏の報告「ロマンス諸語における否定補助語の文法化過程」

小林氏は否定の内容を明確化したり、強意・留保その他の付加的意味を加える副詞・形容詞・代名詞グループを「否定補助語」と呼ぶ。具体的にはフランス語の *personne*, *aucun*, *rien*, *jamais*, スペイン語の *nadie*, *ninguno*, *nada*, *nunca*, イタリア語の *nessuno*, *niente*, *mai*, カタロニア語の *ningú*, *cap*, *res*, *mai* などで、否定語と不定の二つの間を行き来する品詞横断的な単語グループのことである。文法書では否定不定代名詞、否定副詞といったぐあいに品詞別に扱うことが多いが、特にカ

タロニア語においてこれらの単語グループの機能を記述しようとする時にこれらをまとめて考察する必要性を感じるとして、同氏はこれらの単語グループを「否定補助語」と呼んでいる。

小林氏は「ラテン語からロマンス語へさまざまな変化が起こっていく過程において、後藤氏が述べたように文法化が起こっている。その中で否定を表わす用語は、ラテン語においては英語の *nobody* にあたるものとか、*never, nowhere* にあたるものとかいろいろあったが、全く形を変えてしまふ、あるいは消えてしまふ、あるいは使い方がどんどん変わっていつてしまふ、といった現象が起こっている」とし、この発表ではラテン語の *nullus* にあたるフランス語、イタリア語、スペイン語、カタロニア語を取り上げる。

同氏は続ける。「完全に否定する形容詞がロマンス語ではどのように変わっていつているのか。ラテン語においては完全に否定するための形容詞、代名詞、名詞といったものがはっきり存在していたが、ロマンス語ではなくなっていつてしまふ。そのために、私が言うところの<否定補助語>の文法化が必要になってくる。しかし文法化は別に否定に関する現象だけで起こったわけではなくて、ロマンス語の歴史において言語の根本的性質の変化を伴って起こった現象と位置づけることができる。つまりラテン語は典型的な屈折語で、文の中に存在している一つ一つの単語の語彙的な意味が文の全体を構成するためにいちばん重要なものであった。単語と単語の組み合わせは二次的な重要性しか持っていなかった。否定という現象に関しても、個々の代名詞や形容詞がそれぞれ完全な意味を持っていた。ところがロマンス語においては個々の語彙の自立的意味が非常に弱まっていつて、——しかし全体としての文の意味を表示するという必要性から——別の手段が必要になってきた。総合的文から分析的文へという言い方があるが、そのような現象の一部としてロマンス語の否定補助語の文法化があった」

小林氏は、扱っているのがもっぱら現代語である点で文法化<過程>というタイトルは羊頭狗肉であるが、この発表では4つの言語で否定がどのように表わされているのか、またそれらの表現がラテン語のどのような形から発展したのかを調べた、として本題に入る。

「ラテン語の全面否定の形容詞は *nullus* で、この単語は典型的なラテン語的特徴により全面否定を表わす。例：*... aliud iter haberent nullum* 「他の通り道は一つも持たなかった…」(カエサル)。これは英語 *they had no way* の *no* にあたる。また *nulla fabula* と *non fabula ulla* 「どんな話も」(いずれもオウィディウス)に見られるように、*nullus* と *non ullus* はラテン語においては全く等価である。否定を表わす用語は *non* 以外の単語、たとえば *sine* であっても同じことである。例：*sine ullo ... apparatu* 「どんな…様相もなく」(ティトゥス・リウィウス) (*without any appearance*). *sine* の後に来る形容詞を比べてみるとラテン語とロマンス語の違いが非常にはっきりと分かる。*nullus* と別

の否定語、たとえば *non* が使われるときにはきちんとした文法的な意味を持っている。つまり *non nullus* だと *nothing* ではないということで「いくつかの」という部分否定の意味になるのに対し、*nullus non* は「そうでないものは何もない」で全面肯定になる。このようにラテン語においては自立的な語彙がそれぞれ自己を主張しあって文全体の意味を作っているのである。*nullus* にあたるものがどのように使われるかという点で最も面白いのは被比較に「いかなる何々よりも」をとる比較文で、ラテン語ではここに *nullus* にあたるものが出てくることはない。そうではなくて *ullus*, *quisquam* が出てくるのである。ところがロマンス語では *ullus* も *quisquam* も完全になくなっている。言い換えればロマンス語で何らかの単語を作り出さなければならなくなったのである。*nullus* に関しては残っているが、事実上機能するのはフランス語だけである。しかしフランス語の *nul* がラテン語の *nullus* と同じかという点と全く違う。フランス語 *sans nul doute* 「(いかなる疑いも持たずに) 疑いの余地なく」とラテン語 *nullo cum corpore* 「いかなる肉体も持たずに」を比べてみれば両者の違いは明らかで、フランス語 *nul* においてはラテン語 *nullus* が持っていた自立的語彙の意味が弱まり、別の否定語を必要とするようになっていく

「ラテン語 *nullus* に代わるものはフランス語 *aucun*, イタリア語 *nessuno*, スペイン語 *ninguno*, カタロニア語 *cap* である。フランス語 *aucun* は否定補助語として特化しており、それ自身で否定を表わすことができるのはごく限られた文脈においてであって、必ず *ne* とか *sans* といった別の否定語を必要とする。イタリア語やスペイン語のように、動詞の前に来るか後に来るかによって別な否定語が必要かどうかということはなく、常に否定語を必要とする。またそれと同時に *aucun* には不定の用法も残っている。例: *Avez-vous des nouvelles? — Aucune.* このように *aucun* は文脈に依存した形で不定であったり否定であったりするが、これはラテン語にはなかった新しい現象である。こういうことが言ってみれば文法化ということになる。文法化と言えればある新しい表現形式ができたということで、言語がよいようになったのかということと必ずしもそうとは言えない。ラテン語を主とする私から見れば、むしろ言語の<墮落>が起こっているのではないかと、と全体としての結論はそういうことになる」

続いてフランス語 *aucun* 以外のイタリア語 *nessuno*, スペイン語 *ninguno*, カタロニア語 *cap* へと話が移っていく。「*aucun*, *nul* で見たように、不定の意味を表わすのにいくつかの単語が使われ、どちらが正しい、正しくないということはない。このことはフランス語だけでなく他の言語にも共通する。イタリア語の *nessuno* は *nobody* の意味で使えるが、フランス語やスペイン語に比べると用法の幅が広い。フランス語と違って否定の意味を表わすときは *non* がある場合と、ない場合とがある。イタリア語とスペイン語においては、前後関係に関して文法規範が非常にはっきりし

ている。別の否定語が前にあるときは、alcuno（フランス語の aucun にあたる）を使うこともできる。否定と不定の意味が曖昧といった状態があるという点ではフランス語と同じである。しかし「いかなる何々よりも」という言い方をする場合にはイタリア語では nessuno は使えない。同じ場合にフランス語やスペイン語では alcuno, nessuno 式のもを両方使えたのであるが。カタロニア語では珍しい cap（ラテン語 caput「頭」から）を使う。この語は規範では認められなくても単独で否定語になることがある。ninguno や nessuno との差はカタロニア語特有の文法規範の曖昧さから来ている。文法学者がこういうふうに言うべきだと言っている記述と、実際上見聞きする、あるいは文に出てくるものとの差が出てくる。cap が最初に来たときにもう一つ別の否定語が要るのか、文法学者は要るといって、実際上はない場合も随分出てくることが分かる。cap が他の否定語がなくてもゼロの意味になるのは poc o cap（フランス語 peu ou aucun, イタリア語 poco o nessun）を見れば分かる。ラテン語からロマンス語に変化していくときに、ラテン語に存在していた語彙の自立的な力、全面否定、不定というまさに単語そのものの中に存在していた力が弱まっていて、それ以外の補助的な単語と単語の組み合わせや前後関係で否定が表わされるようになったのである」

3. 質疑応答

司会：文法化についてはどの学会でもやられているし、雑誌（例えば、『月刊 言語』2004年4月刊）などでも取り上げられており、今更という感もありますが、文法化の概念が直接的にはメイエに遡るということで、文法化の〈本家〉としてのロマンス語学会も黙ってはいられないということから今回の総合討議のテーマに文法化が取り上げられたのではないかと思います。発表者がお二人と少なかったのは残念ですが、充実した内容の発表をさせていただきました。それでは会場からお二人へのご質問、コメントをお願いします。

古浦（敬称略。以下同）：小林先生への質問ですが、否定補助語にはフランス語で言えば ne...pas の pas や ne...point の point のように、つまり「一歩も…ない」の「一歩」、「一点も…ない」の「一点」のように小さなものが出てきますね。その他どういうものが出てくるかという方向でのご発表はなかったようなのですが、何か補足がございましたらお願いします。

小林：フランス語の ne...pas, ne...point などは私が扱ったものとはちょっとずれていってしまうような気がします。現在のフランス語においては pas や point は完全に否定語の一部であって、それがなければ否定がないというものです。むしろ ne...pas の ne が発音されなくなって pas だけで否定になってしまう。私が扱ったのは補助語であり、否定に何らかの意味を付け加えたり強調した

りするものを扱ったわけです。ですから ne...pas, ne...point については全然触れませんでした。

古浦：小さいものが加わるというのは一般的な現象かと思うのですね。日本語でも「夢にも何々ない」とか「露知らず」とかと小さなものが出てきます。それから、ラテン語の caput から来ているカタロニア語が全面否定というのは、caput が非常に重要なものなので、大きなものが来ているので全面否定というふうに解釈できないのでしょうか。

小林：私が文法化過程は羊頭狗肉だと言ったのはまさにそうなんです。カタロニア語で cap が二つの意味で使われているのは面白い現象だと思いますが、これが「頭」の意味から否定になるという過程については私は全然調べていなかった。中世のカタロニア語の用例を見れば分かるはずのことだと思うのですが。付け加えておきますと、cap というのは「何々に向かって」という前置詞でもあります。

後藤：私の知っている範囲で補足しますと、フランス語だと今まで出た他に mie や goutte や mot という否定の強めの言葉があったわけです。その中で mot というのは動詞に限られていて、dire とか現代語の sonner にあたる単語、音の出る意味の動詞に使われていたという論文を読んだことがあります。たとえば pas が「一歩も歩かない」とか「一歩も進まない」といった動詞でよく使われていて、それが広まったと。それが文献で確かめられれば面白いのだけれど、残念ながら文献ではそこまで確認できない、ということであったとおぼろげに記憶しています。

司会：文法化を非常に狭く捉える捉え方とどんどん拡張していく捉え方があると思いますが、そのあたりについてはどのようにお考えですか。発展するにつれて何が文法化かよく分からなくなってきたような印象が少しあるのですが。

後藤：結局のところは言語の変化を説明できればいいのでしょうけど、拡散しすぎてしまうと、対象が広がってしまって何でも言ってしまうから面白くなくなってしまいます。逆にあまり絞りすぎると、言える範囲が少なくなってしまいます。その範囲がどの程度になるかというのをいろんな人がやっている、現在はそういう状況なのではないかと思います。

小林：現在、言語学の内部で文法化についていろいろなことが話されているということについて、あまり知りませんでした。実際のところ、今回、先ほどの『月刊 言語』の特集などいろいろ読んでみて勉強したわけです。私自身は文法化とはこういう具体的なものとしてしか解釈できなかったものですから。その前からカタロニア語の文法を記述することをやっていたときに、カタロニア語においては規範の曖昧性というのが常に出てくる。その一つの現われが、この cap を使うときに別の否定語が必要か必要でないかというものです。私は否定に関心を持っていましたから、この学会で今回、文法化をやるときに、まさにこれこそが文法化の一つということで文法化につ

いて限定的に勉強したわけで、それほど勉強したわけではありません。

司会：小林先生のご発表はまさに典型的な文法化の例を扱ったものですね。語彙項目から出発して意味が希薄化していくという意味で否定辞は文法化の特権的な例ですから。

昨年の菅田先生のご発表は、文法化と語彙化の間でバランスを取り直す必要があるといった主旨のものだったと思いますが、菅田先生、そのあたりいかがですか。

菅田：今日のこの後の発表³⁾でもインターフェースという言葉を使いますが、ある程度どちらの言葉で呼ぶことも可能なものが随分あると思います。メイエ自身がすでにちょっと混乱しているように思われるというふうには書いていたと思います。英語で言いますと today にあたるものが二つの単語がくっついてできている、それを文法化の例としてメイエが挙げています。私から見ると、これは二つの単語が一つの単語になっているわけですから語彙化して新しい語彙単位ができています、と。おそらく文法の単位として捉えられる単位、つまり機能語だったら語彙と言わないで文法の一部と考えているから、そして today については名詞として捉えないで副詞として考えているから、文法化と呼んだのだと思います。どちらとも言い切れないものがたくさんあるのではないのでしょうか。

秦：フランス語はロマンス語の範囲ではいちばん摩滅した言語というか、音的に随分すり減って音節の数が減ってます。特に母音で始まる動詞の前では ne は n という子音一つで n' になってしまふ。非常に頼りない子音なので、どうしても何かが要る。だから特に小林さんのおっしゃる否定補助語が他のロマンス語よりも主役をなすこともある。つまり pas ですね。pas du tout と言うときには、これだけで他の否定語がなくても否定になる。それから口語のフランス語では je ne sais pas が je sais pas になるとかで、かなり飛び抜けてフランス語の補助的な部分が前面に否定として強く出ている。そのへんのことを比較されたうへでのご見解が何かあれば伺いたい。

小林：単に「彼は何々ではない」と言うときはフランス語だけが il n'est pas... と pas が必要になりますが、しかしそれは単純な「何々でない」「何々しない」という、いちばん正当否定と言いますか、そのような文にしか差は現れていないと思います。それ以外の私が挙げた英語の nobody なり nowhere なり no をつける否定補助語に関して言うと、フランス語が特別、否定補助語を必要としているという要素は私には全然見受けることができませんでした。

山本：後藤先生の quomodo の話ですが、イタリアに関してはおそらく quomo の quo に発展していった形と quomodo のまま残った形との2系列を区別する必要がある、たとえば方言学なんかをやると出てくると思います。これは実は疑問詞を関係詞に使う用法に関する問題と考えることができるのではないかと思うのですが、その点から言いますと quomodo が徐々に quomo になっていくとい

う、そういう方向から見るだけでなく、関係詞というある特定の起源、機能があって、その関係詞としての用法をある単語が引継いだときにがらっと変わってしまうという変化の仕方があるのではないかと私は疑ったことがあります。つまり徐々に変わったにしては古くからありすぎるのではないかという疑いです。

小林先生に対しては、感想じみたことで申し訳ありませんが、たとえば文学的に有名なロマンス語だけでこういうふうな現象が一般的に見られると言ってしまうのかどうかいつも私は迷っています。ちなみに否定に関しましても、北イタリアだけでも4つか5つくらいははっきりと違った傾向が見られます。

後藤：関係詞との関係については説明では省略したのですが、ラテン語 *quomodo* にも関係詞から来ていると思われる用法はあります。ただ古典語としては他の指示詞とコレラティヴに使う使い方から、やはり様態や程度で使う用法が主であったのです。そこから時の意味であるとか原因であるとか、より機能を増やしていった汎用的な従属接続詞になっていく、これはやはりかなり時間をかけて起こってきたことであろうと考えられます。

小林：イタリア語に関しては様々な方言差があるということを見野に入れなければならないことは当然ですが、今扱った *nessuno* に関してイタリア語でたとえばどのようなヴァリエーションがあるのかちょっと知りたいのですけど。4種類ほどあるということでしたが、*nessuno* 以外に4種類ほどあるということでしょうか？

山本：特に *nessuno* だけに関して言ったわけではありません。

荻原：スペイン語に「もちろん」という意味で使われる *¡Cómo no!* というのがあります。これは否定というよりも反語的などころから来ていると思うのですが。それともう一つ、*en absoluto* は全く肯定的な形をしているのですが、実際は否定的な意味で *not at all* にあたる言い方です。これらについて何かご研究はありますか？

後藤：*¡Cómo no!* については、思いつくところでは反語「いかにそうでないことがあろうか」から来ているのではないかと思います。

小林：*¡Cómo no!* というのはもちろん *Why not!* ですが、反語が強い肯定になるというのは比較的好くある言語的現象で、何かスペイン語で特別意味があるとは思えないのですが。*en absoluto* に関しては何も存じません。

川口：文法化の現象の中で、たとえば後藤さんのお話のいちばん最後に *beaucoup* が出てきましたが、これについてはつい先日、フランス語学会の方で文法化の例として語られていました。⁴⁾

1) たとえば *bel cop* が *beaucoup* となって、もともとあった副詞 *molt* (< *multum*) を駆逐し、新たな

副詞になる場合で、これを文法化と呼んでいます。次に2) たたとえばロマンス語では不定詞の後ろに「持つ」という動詞の現在形が来て、それが未来形になります。つまりもともとあった未来形のカテゴリーが組み替えられて新たな未来形になる場合です。これもたぶん文法化と言うのでしよう。最後に指示詞の系譜があります。3) 指示詞が意味変化して、それまでには全くなかった冠詞のような新たなカテゴリーになっていくような場合です。これも文法化と言うとすれば、上に述べた1) から3) は文法化の議論の中ではどのように語り分けられるのでしょうか。

後藤：尺度を考えます。より語彙的なもの、内容語的なものから、機能語的なもの、接辞的なもの、つまり派生接辞的なものと文法的な接辞的なもの、それから最後にはゼロと。その連続体を考えてより右側の方に移っていくというように考えれば、先ほどの3つの例でも統合できるものが出てくる。ただ新しい文法的なカテゴリーができるような場合もそれに収められるかどうかは少し疑問なところがあります。それはかなり大きな一大変化であって、別の扱いをした方がいいのかもしれない。

小林：私はそれについて特別な考えを持ってはいたわけではないですが、今のようなご指摘を受けますと、我々が文法化と言ってもさまざまなカテゴリーに分けて別々に考えなければいけない、今の3つのことが全部別々のことなのか、共通性のあるもの2つがあるのか、考えないといけないと思います。先ほどの、ラテン語の未来形がなくなって別の新しい未来形が作り出される、それから一つの特定の動詞だけではなくてあらゆる動詞に可能なものとしてできあがっていく、ということがありますね。それからロマンス語に共通の副詞を作る *mente* というのがありますね。ああいったものもラテン語には全く存在しなかったわけですが、ラテン語の一つの言い回しが今度は副詞を作るための語尾になる。これはまさに文法化という現象に思います。そのようなものが言語の歴史の中にあり、それを個別的にきちんきちんと全部どういう現象として名称をつけるべきかということは、確かに考えなければいけない問題なんだなという思いをしたと申し上げておきます。

司会：発表者のお二人、会場の皆様、熱心に討議に参加して下さりありがとうございました。

4. まとめ

ジュールダン氏（モリエール『町人貴族』の主人公）がそうと知らずに散文を作っていたのと同様に、ロマニストはずっと以前から知らず知らずのうちに<文法化>研究を行っている。ロマニストはラテン語（俗ラテン語）からロマンス諸語への変化の過程においては文法化はごく当たり前の現象であり、文法化が問題になっているといちいち指摘することは無用のことと考えてい

た、と言ってもよいかもしれない。

ロマニストが従来から行ってきたこの<文法化>研究は個々の言語事象としての文法化の研究（後藤氏の発表にある文法化のミクロ的把握がほぼこれに対応していると考えられる）で、これについてはロマンス言語学に膨大なデータと研究の蓄積があるし、今後も蓄積され続けるだろう。

これに対して、主として英語圏で1980年代以降発展してきたのは理論としての文法化（同じく後藤氏のマクロ的把握）である——もちろん、英語やその他の言語の具体的事象としての文法化研究も同時進行で進められてはいるが。この理論としての文法化の重要性は90年代になってロマンス語圏でも認められるようになり、国際ロマンス語学会などでも文法化関連の発表が高い割合を占めるようになっていく。

この「文法化」の持つ二重性は問題を複雑にする要因にもなるが、ミクロとマクロの間を頻繁に行き来することで文法化研究がいつそう発展していくことが期待できる。

個々の語がそれぞれ完全な意味を持っていたラテン語から、個々の語の自立的意味が弱まり別の手段に訴えるようになっていったロマンス語への変化過程は、一面からすれば小林氏の言うように言語の<墮落>であろうが、その過程の中で文脈依存という新たな秩序の模索が始まり、この過程が言語研究に貴重な材料を提供していることも確かである。

註

1), 2) 後藤氏の本誌所収論文を参照。

3) 菅田氏の本誌所収報告を参照。

4) 2005年4月16日、慶應義塾大学（三田キャンパス）に於いて開催された日本フランス語学会特別発表 Christiane Marchello-Nizia, *Grammaticalisation et subjectivité : la création de l'adverbe 'beaucoup' en français* のこと。